むくどり通信

2023. November
No. 280
11
日本野鳥の会大阪支部

特 集

榎本佳樹の野鳥愛

― 榎本の思いを今に ―



榎本佳樹生誕 150 年記念特別号

榎本佳樹の野鳥愛

― 榎本佳樹の思いを今に ―



鳥類は国有の宝物である。
今の時代に生きている人間だけが
楽しんで、その後は絶滅しても
差支えないというものではない。

われわれが楽しんだと同様に
われわれの子々孫々までも
楽しますべく、その保護と増殖に
力を尽くすことは義務である。
榎本 佳樹

榎本佳樹生誕 150 年記念特集にあたって

榎本佳樹さんは、日本野鳥の会大阪支部の創設に深く関わられ、支部黎明期に指導者として活躍された方です。

日本野鳥の会創始者の中西悟堂をして「鳥類保護の権化」、「日本鳥学界の至宝」と言わしめた在野の鳥類研究家として、広く名を知られていました。その著書「野鳥便覧」（上下巻、大阪支部発行）は、野外識別に重点を置いた画期的な図鑑であり、長い鳥類研究の集大成といえるものでした。

榎本氏の生誕 150 年にあたり、明治・大正・昭和と野鳥研究に生涯をかけた氏の足跡を多くの人々に伝え、野鳥とそれを取り巻く自然環境が厳しさをます今、改めて、その思いに触れ、野鳥の保護について考える契機にしたいと思います。

榎本佳樹先生を偲ぶ　　平松道夫

戦争の進行と共に沼や荒地が開拓され、山野の森林は戦力増強のため逐次伐り荒されて行ったことなどは先生の心に深い打撃を与えたことであろう。

鳥の捕獲、卵の採集、繁殖地の激減など愚痴っぽいと思われる程心にせられていた。

心から鳥を愛し、野鳥の棲息の安否のみを気にかけていられた先生も、戦争中の食料不如意（ふにょい）のため逝去を早められた。

明治二十年頃の少年時代から古稀を過ぎる迄の永い間、一市井（いちしせい）の徒（と）として、倦まず野鳥の生態研究とその愛護運動に捧げられた足跡は仰ぐだに尊い。

先生の残されたこの尊い足跡はその著書を通じて、あるいは直接教えを受けた人々によって必ずや継承せられ、先生の地下に眠る霊に応えるであろうことを信ずる。

「野鳥」昭和二十四年一月号（通巻 128 号）から抜粋

※平松道夫氏：日本野鳥の会大阪支部の第二代幹事、藤原廣蔵氏（後に第二代支部長）らとともに支部黎明期を支えた一人。岸和田市出身。

CONTENTS　2023.11　No.280

2 榎本佳樹生誕 150 年記念特集
3 榎本佳樹ってどんな人
4 榎本佳樹ゆかりの地
6 榎本佳樹と大阪の鳥
7 榎本佳樹の探鳥スタイル
8 榎本佳樹をめぐる人々
9 「野鳥」誌と榎本佳樹
10 榎本佳樹の足跡を訪ねる探鳥会
13 野鳥の会の回顧
14 榎本佳樹の生涯　略年譜
18 「野鳥便覧」復刻版の発行について
19 身近な鳥から鳥類学 第 69 回 越冬イワツバメのねぐら
20 かもめコーヒー・今日のお客さん 第 10 回
21 小山慎司の日本列島鳥見旅　第 19 回
22 探鳥会報告 / 鳥の羽根鑑定大会 2023
23 保護活動　夢洲・大阪湾岸の野鳥を守ろう
24 研究ダイアリー
25 鳥信　シラオネッタイチョウ、アホウドリ他
30 幹事会報告 / 本の紹介
31 次号予告 / 編集後記
32 大阪自然史フェスティバル 2023　案内他

■表紙と本頁の鳥　イカルチドリ 2014 年 1 月 和泉市

「最初の射撃で飛び立ったイカルチドリの声を聴いたから、結局馬賊が射撃してくれたおかげで豆満江にイカルチドリの居ることを知ったわけである」（「野の鳥の思い出」から）。

榎本佳樹の野鳥観察の中で、最も印象的なエピソードのひとつが、明治 40 年の朝鮮（現在の北朝鮮と中国の国境近く）での夜間行軍中の出来事。自らの命が危険にさらされる中、銃声に警戒して飛び立ったイカルチドリの声を識別して、生息が確認できたことを記録しているのが、なんとも凄いところ。　　写真・文　納家　仁

榎本佳樹って　どんな人？

徳島市出身の榎本佳樹は、幼少の頃から狩猟をする兄の影響もあり、吉野川河口部などで野鳥に親しむようになりました。

当時は、図鑑などがなく西洋の書物から知識を得るなど独学で野鳥の野外研究に打ち込むようになり、中学卒業後は軍人となり、台湾や満州、朝鮮などでの軍務の傍ら、鳥の観察や採集を行いました。

軍隊では、日露戦争には陸軍大尉として参加、軍歴を終えた後は、高野山中学で 16 年にわたり教師を勤め、同中学を退職した昭和 8 年（1933）に大阪市に転居。昭和 12 年（1937）の大阪支部の設立に関わられ、支部の指導者として探鳥会での実地指導にあたられました。

藤原廣蔵第二代支部長が、発足当時の探鳥会での指導者榎本佳樹のことを以下のように振り返られています。

・榎本先生はジャンパーを着て防水の登山帽を被り、小さいリュックを背負って、双眼鏡を肩にかけ、右手には扇子を持って居られる。これはその後もいつの探鳥会でも変らぬ先生の姿であった。誰かが「その扇子は鳥を招くためですか」と皮肉ったことがあるが「私は汗かきで暑がりですので」とまじめなお返事であった。

・初心者のために出てくる鳥一つ一つにつき懇切丁寧に説明され、どんな愚問にも何回でも親切に答えられるのである。

・鳥類の野外識別については我国の草分けで、普通最も困難とされているシギ、チドリ類、ワシタカ類、海鳥類などの野外識別は先生の最も得意とされるところで、この方面の先駆者である。従って当時、大阪支部の催す淀川、住吉浦などの探鳥会は誠に特色のあるものであった。

・野外では一刻も鳥から注意を外らすことはなく、車中でも常に窓外の鳥影を求めて居られた。このことは高著「野鳥便覧」上巻に「観察の機会」と云う項目中で「鳥類の中には一度見聞の機会を逸したら、観察者の一生の間に再びそれを見聞することの出来ない様なものも少くないから常に油断なく注意していて不覚をとらぬ様にせねばならぬ…・・・…」とあるのを自ら実行して居られたのである。

日本野鳥の会大阪支部報 No.41：3-4（1971）から



大阪住吉浦にて　昭和 11 年 12 月 63 歳当時

榎本は淀川河口や住吉浦（現在の平林貯木場周辺にあった埋立地の湿地）で野鳥を観察し、記録を残している。

「大阪市付近の渡り鳥」：ツルシギ 400 羽以上、キアシシギ 300 羽以上、オオソリハシシギ、キョウジョシギ、ムナグロ 200 羽以上など。いずれも 1 ケ所での観察記録（「野鳥」昭和 9 年（1934）6 月号）。

今ではとても考えられない数が飛来していたことが分かる。

榎本 佳樹（1873 ～ 1945）

明治 6 年（1873）11 月 5 日、徳島市生まれ。

陸軍幼年学校から士官学校に進み、明治 30 年（1897）以降、明治 44 年まで軍人生活を送る。大正 5 年（1916）日本鳥学会入会。

大正6年、高野山中学に奉職。16 年間を高野山で過ごし、付近の鳥類調査を実施。昭和8年（1933）、山を下って大阪に転居、大阪支部の創設に関わり、支部の発足後は探鳥会の実地指導者となる。

昭和 20 年（1945）1月急逝。その 6 ケ月後の大阪大空襲で都島の自宅が炎上し、未発表の資料等が焼失した。

著書に「野鳥便覧」の他、「野の鳥の思い出」があり、又、動物学雑誌、鳥、野鳥、農林省発行の鳥獣報告集等に数多くの報告、論文を発表された。

日本初の ヒメノガンの同定と和名の命名者としても知られる。

榎本佳樹とその時代を振り返る意味

榎本は、自分が観察した野鳥の記録や生態などを、動物学雑誌、鳥、野鳥、鳥獣報告集等に数多くの報告、論文として発表されました。榎本の残した観察記録は、明治、大正、昭和（戦前）の野鳥の生息状況を知ることのできる貴重な資料となっています。特に、淀川河口や住吉浦にはよく通われシギやチドリを詳細に観察するとともに、開発により生息地が失われていくことを憂い、その保護の必要性を事あるたびに訴えていました。

「鳥類の将来に関しては実に寒心に堪えないものがあり、大阪府では特にそれが甚だしい様に思われるから、鳥類を愛好する人や、鳥類研究を事とする人等は、鳥類に関する知識に愛護心の普及に努めることを第一の急務とせねばなるまい。」（大阪府郷土博物誌第 1 編（昭和 9 年刊）大阪府の鳥類についてより）。この言葉からも、榎本の野鳥保護への強い思いが読み取れます。

榎本の生きた時代は、鳥は撃ち落としたり網で捕らえて食べるもの、捕まえて飼うものであり、観察して楽しむという人はごく一握りでした。又、都市部周辺での開発が急速に進み、特に大阪では多くの自然が失われ、野鳥がその数を大きく減らした時代でした。

榎本は、著書「野鳥便覧」の中で、鳥を見る人の心に及ぼす精神的な影響を種ごとに明記し、鳥が人間にとってなくてはならない存在であること、鳥を保護することの重要性を繰り返し訴えています。

戦乱の世相の中で、鳥や自然を愛する心を広めようと務めた榎本。時代を先取りした野鳥保護思想と言える「榎本の野鳥愛」は、今の時代に生きる私たちにも大きな勇気を与えてくれるものです。

榎本が早くから警鐘を鳴らしたように、シギやチドリは大きく数を減らし、今やそのほとんどが絶滅を危惧される状況となっています。夢洲をはじめ大阪湾岸の水鳥生息地が失われようとしている今こそ、榎本に学び、その思いを伝え広めるときではないでしょうか。

榎本佳樹　阿讃地方ゆかりの地（徳島・香川）



◎徳島県 M6 ～ M27、M45 ～ T6

明治 6 年、徳島市生まれ。
幼少期は病弱で小学校入学は 1 年遅れ。
15 歳の頃から兄の狩猟について山野を歩く。
吉野川河口などで鳥を観察。
中学（旧制）卒業の後、士官候補生として丸亀歩兵隊に入隊。
明治 45 年に除隊後住んでいた丸亀から徳島市に戻り 6 年間暮らす。



ミヤコドリ　野の鳥の思い出から

◎香川県 M44

明治 44 年 4 月満州から内地（丸亀市）に帰還。5 月除隊。丸亀にて鳥類の実地研究を行う。

鳥類思出記 17
阿讃地方―其一
イカルチドリ

陰暦十五夜頃の月が煌々と冴えた、霜でも降りそうな冬の夜半、人家から遠く離れた、淋しい川原の真中にいて、イカルチドリのピューン（ピー、ピュー、ピーン等）ときこえる鳴声を聴くと、寒さが一入身に染みる感じがすると同時に、何とも言えない静かな気持ちになって、心も月の様に冴えて来るのを覚えるのが好きで、住所に近かった土器川へ、冬の最中の月明の夜半、わざわざ一人で行って、イカルチドリを聴いたことが度々あった。　「野鳥」98 号

鳥類思出記 19　阿讃地方―其四

― 小さな木賃宿へも泊めてもらうことのできない程、貧乏らしい姿でもなかったと思われるのに。・・・富尊貧卑の風が益々盛んになって、殆んど停止しない有様の現今では、従来自分の服装に関して人から何と云われようと、そんなことに気を留める程賢くなかった私も、他人に迷惑をかける様なことがあってはならぬと、注意を要する時代が切迫して来たことを自覚し始めたが、鳥の社会にはこんなうるさいことはないであろう。

明治 45 年 5 月、剣山の小屋で宿泊を拒否され、帰路の焼山寺山麓の宿でも宿泊拒否されるというエピソード　「野鳥」106 号

中学校（旧制中学）時代の榎本佳樹

・中学校付属の図書館にある英米いずれかの国の博物書や百科事典などを借り、今から思えば不完全な英和辞典と首っ引きしながら読んで、私の見た鳥が英語の何という鳥に相当するかを覚えたり、・・・野外で見聞した事項や、兄が採って来た鳥の測定を記帳したりしていたのが私の鳥類研究への発足であった。私のいた中学校では、博物、外国地理、幾何、代数など、何れも英語の原書によっていて、それらは裕福な家の子弟だけが買い得ている、級中に二三部しかないのを、他の大部分の生徒が借りて、生徒の互選による委員若干名が、誰かの家に集り、寒天版刷にして、原書を持たない者に配布していた様な時代であったから、英語の本を読む力は、曲がりなりにでも、現今の中学生に比べて幾分優れていたかも知れない。　「野鳥」102 号　榎本佳樹氏古希記念特集　経歴抜粋記から

・中学校の同級生の一人が新町川の岸に近い所におりているセグロカモメに石を投げつけて捕らえた。翌日徳島中学校植物教師の手ではく製にされ、同校の標本室に飾られて、それから二十五六年後、今から二十二年前、（注記：おそらく 1914 年）、同校を訪れた時にはまだ可なりよく保存されてあった。　「野鳥」S11.10 月号　「鳥類思出記」少年時代

鳥類思出記 17
阿讃地方―其一
池辺の怪物

明治四十四年の秋末のある日、それ等の池の一つで、黒色と白色からなる、奇妙な形をしたものが四つ、半ば涸れた池底の水辺にあるのを見た。嘴と脚らしいものとがあるので、多分鳥であろうとは思うたが、余りにも形がへんてこで、しかも四つ共全く同一の形をしたまま微動だにしないので、鳥でなさそうな疑もあり、不思議に思うて観察を続けていても、依然として動かない。そこで筆者は、試しに池の堤防上を怪物の方へ五六歩馳ってみた。そうすると四つの怪物は立ちどころに形を変えて、鳥の姿に復すると同時に、ツイ、ツイ、ツイ、ツイ、ツイ等に聞こえる声で、けたたましく鳴きながら、上尾筒付近の白色部を明瞭に現して飛び立ったので、著者は「なーんだ、〇〇〇〇であったのか」と独り言を云った。



「野鳥」98 号

榎本佳樹クイズ　①
この怪物の正体は何でしょうか？

〇〇〇〇　答えは 9 ページ

榎本佳樹 ゆかりの地（旧日本領）

榎本佳樹の活躍した海外の舞台は、当時は日本の領土であった。若き日の軍人・榎本は澎湖島、台湾本島、北朝鮮、満州での任務にあたり、そのかたわら、休日など勤務以外の時間を利用して内地では見ることのできない貴重な野鳥の観察や調査を行った。軍隊では地図作成に従事したことがあり、北朝鮮での特殊任務もおそらくそのための調査であったと思われる。軍務を離れて以降の大遠征は、記録に残されている限りでは昭和 13 年の森田大阪支部長と二人での樺太の鳥類視察の旅のみである。　「野の鳥の思い出」参照

◎樺太 S13

昭和 13 年 7 月 24 日から 8 月 1 日まで
樺太の鳥類を視察の旅
大泊から多来加湖の一部までを左廻りで周回



シマアオジ
野鳥便覧下巻

たらいかこ
多来加湖

大泊

◎満州 M42 ～ 44

明治 42 年 12 月から 44 年 4 月末まで大連の近くでの任務、休日に大連湾や南山付近で鳥類調査

長春



コオリガモ
野鳥便覧下巻

とまんこう
豆満江

◎北朝鮮 M40 ～ 41

明治 40 年 9 月から 6 ケ月間、軍の特殊任務のために下僚一人、通訳一人と冒険的旅行
・豆満江で馬賊の襲撃に会いながらもイカルチドリを確認

大連

◎澎湖島（ほうことう） M34,35

明治 34 年 4 月から 35 年 4 月まで赴任
35 年 2 月には、猫嶼（ねこしま）でアホウドリ（親鳥）を採集
※台湾のアホウドリは現在絶滅し見ることはできない

アホウドリ
私がアホウドリを最も多く見たのは明治三十五年二月下旬、･･･ 猫嶼へ行った際で、その時は雛の孵化も大部分終って、昼間親鳥が比較的少い時期であったが、それでも尚お頗る（すこぶ）多数居て、少々ながら研究できた。
野の鳥の思い出「澎湖島」



アホウドリ
野鳥便覧下巻より

◎台湾本島 M42 ～ 44

明治 35 年 5 月から 36 年 5 月まで赴任
・採集した鳥を入れる袋として原住民から生首を入れる「首袋」を 2 個買う
鳥の多い時代で、袋に入りきらぬほど多数の鳥を採ることも珍しくなかった

ねこしま
猫嶼

台南市

※アホウドリの絶滅　明治 30 年（1897）前後に、多くの日本人が、アホウドリなどの鳥類を求めて、広い太平洋に進出。アホウドリの羽毛を外国商人に売却し莫大な儲けを得ることが目的だった。明治から大正にかけての日本は年間に何百万羽という途方もない数の鳥類を輸出する鳥類輸出大国であった。平岡昭利著「アホウドリを追った日本人」岩波新書（2015 年）にアホウドリ乱獲の歴史が詳しく書かれている。鳥島や尖閣諸島、東沙諸島、太平洋の島々等の記述はあるが、澎湖島については触れられていない。

榎本佳樹と大阪の野鳥

◆大阪府初の鳥類目録をまとめたのは榎本佳樹

「大阪府郷土博物誌 第 1 編（昭和 9 年 6 月刊）大阪府の鳥類について」 確認種＋確実と推定される 192 種をリストアップ（1934 年 3 月調）。当時の野鳥の状況を知り得る貴重な資料である。

◆大阪市内で繁殖する野鳥は、何種類？

「大阪市内で繁殖する野鳥について」榎本佳樹　昭和 14（1939）年 3 月

確実に繁殖すると思われるものとして次の 16 種があげられている。

ハシボソガラス、スズメ、ヒバリ、モズ、オオヨシキリ、セッカ、ツバメ、コシアカツバメ、〇〇〇〇、ヨシゴイ、カルガモ、カイツブリ、シロチドリ、コチドリ、コアジサシ、バン

又、繁殖の疑わしいものとしてハシブトガラス、ムクドリ、コカワラヒワ、カワセミ、ゴイサギ、イソシギ、アジサシなど 7 種があげられている。

スズメの他ではただ〇〇〇〇が未長く市内に頑張り得る見込みがあるだけで、他のすべての種類は近い将来、年月とともに減少することはもちろん、種類によっては今後 1 年間余命を保ち得ないことが明らかなものさえあるので、鳥類の棲住による大阪市の風致は、絶滅の直前にあると言わなければならず、せめて一小部分でも鳥類の棲住繁殖に適する場所を保存して、無くなれば将来絶対に復元できない天然記念物である鳥類の地方的絶滅を防ぎたいものである。

榎本佳樹クイズ②

「大阪市内で繁殖する野鳥について」の中で書かれた

〇〇〇〇って

何の鳥でしょうか？

答えは 9 ページ

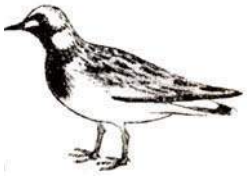
ヒント

〇〇〇〇は・・・当時から大阪市内中心部の諸所に点在する銀杏樹に営巣繁殖し、市の周辺部や郊外ではほとんど繁殖しない一種独特の習性を持っている。

※大阪博物学会［編］『吉田博士祝賀記念誌』第 1 巻，大阪博物学会，昭 14. P877 ～ 881

現在は都市鳥として大阪市内でも普通に繁殖しているヒヨドリやキジバトが当時は、繁殖していないことが分かる。ハシブトガラスやムクドリについても繁殖が疑わしいとの表記となっている。逆にコシアカツバメやヨシゴイの繁殖が大阪市内で確実とされていることが、現在と大きく変わる点である。

榎本佳樹の見たシギ・チドリ



榎本が、大阪府内で一番よく通った場所が、淀川河口部と住吉浦（平林埋立地）でした。榎本はここで多くのシギ・チドリを観察しています。「野鳥」や「鳥」などへの記録の報告ばかりではなく、当時の高級グラフ雑誌『ホーム・ライフ』（S14.5.1 発行大阪毎日新聞社刊）に「渡り鳥」と題したエッセイを書かれています。その一部を紹介します。



大阪近郊には近ごろ鳥が少なくなった、それも渡り鳥など次第に少なくなって行く、というのも煤煙の都であり、人工の都会であってみれば仕方ないことかも知れない。

私は鳥ずきだけれども、そしてもう五十年というもの鳥を研究してきたけれど、まだ家で鳥というものを飼ったことがない、私はよく渡り鳥を見に行く、それも大阪ではあの木津川と大和川の間、住吉公園の西の俗に住吉裏という葦のはえた湿地である。・・・・略・・・・

こういうと、私はいつもこの住吉裏で鳥の傍にいるようであるが、やはり鳥は敏感だから、なかなか鳥の傍へ行けるものではない。近くて百㍍シギ・千鳥になると、どうしても二百㍍から三百㍍ははなれている、肉眼ではわからない、双眼鏡でじっとみているのである、・・・略・・・

大阪ではこの住吉裏以外に阪神電車の尼崎線を「フク」というところで降り、新淀川の堤防へ出て、下口へ歩くと川の中の洲がある、今年もここはまだくるであろう、三時間でも四時間でも長い日には夕方までじっと私はいる、春のうちはまだいいが夏になるとなかなかに辛い、じっとみている、ああの鳥は今日は鳴き方がいつもと違っている、では、ああいう鳴き方もするんだな、ということがわかる、今日はこういう風にエサを食った、そうするとああいうエサのくい方もするんだな、と一々かきとめスケッチもしておく、鳥の研究は五十年にもなるが大阪ではまだ七年ばかりである。・・・略・・・

シギなどこの住吉裏では時には一つの群で二千羽くらいやってくることがある。足の赤い珍しい京女シギなどは何千と淀川の堤防にくることさえある。・・・略・・・私がこの住吉裏に出かけて長く時間のかかったときは鳥が多かった日か珍しい鳥の来ていた日である。

※「住吉裏」浦と書くのが一般的であるが、ここでは裏と表記されている

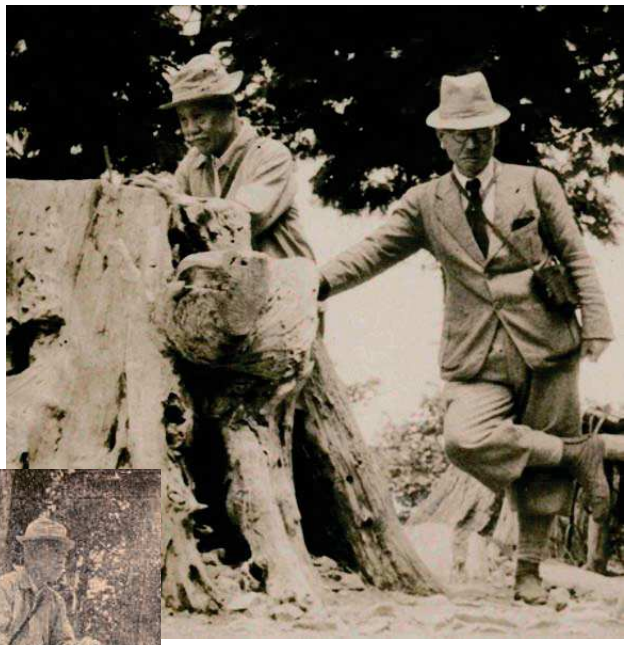
榎本佳樹の探鳥スタイル

今から 100 年ほど前、当時はどんな格好で、またどんな思いで野鳥を観察していたのだろうか。残された記述から榎本の探鳥スタイルが浮かび上がってきます。

「古い灰色の山服着用、同色くしゃくしゃの運動帽を冠り、ルックサックを背負って扇を持った、鼻下に白髭のある六十五六歳、背の高くない風采の揚らぬ老人」

昭和 12 年 4 月、九州有明海への探鳥にあたり、博多駅まで迎えに来てくれる初対面の福岡の野鳥研究家、安部幸六氏に前もって自分のことをこう知らせていたもの。

写真はその 3 年後の英彦山、安部幸六氏との探鳥風景。





福岡の英彦山での探鳥　ジャンバー姿で木の切り株で下半身が隠れているのが榎本、右は安部幸六氏。安部幸六氏は背広にネクタイ姿で足元はゲートルに地下足袋

左写真　英彦山千本杉岩上の榎本。足元は黒い皮靴と分かる。
「野鳥」102 号（昭和 17 年 11 月号）から複写引用
昭和 15 年（1940）6 月 12 日　榎本 66 歳当時
「野鳥」76 号（昭和 15 年 8 月号）に中西悟堂が「九州の旅」として報告している。　上写真は中西悟堂撮影の写真を一部拡大

探鳥時の持ち物

・台湾時代の持ち物
弁当、秤、古新聞紙二三枚、草鞋の穿替、猟銃、銃器手入材料、双眼鏡（8 倍）。　「野の鳥の思い出」から

※榎本は多くの鳥を猟銃で採集して、測定や絵に描いて記録を残してきたが、晩年には、採集は行わず、観察のみであったと思われる。

ただし、野鳥便覧上巻総説の「携行品其の他」の項には、「双眼鏡（4 倍から 8 倍）、地図、写真機、尺、秤、解剖器具、拡大鏡、剥製材料、写生用具、天幕、其他一般旅行登山等に必要な物品中、所要のものを携行すればいい」とあり、解剖器具や剥製材料があげられていて、鳥の採集と剥製を作ることを前提としたものとなっている。

若い時分から人一倍銃猟がお上手だった先生は背負いきれないほど沢山の鳥を銃獲されてはそれを一羽一羽丁寧に測定して、測定済の鳥は隣近所へ全部贈呈して了われたとのことである。（平松道夫）「野鳥」128 号

・その地の鳥類棲住状態や繁殖時期などを考慮して、必要以上のものを採らない。
・「自分が採集しなければ他人に捕られてしまう」と言う様な考えで、鳥類や植物などを採ってしまうのは、甚だよくないことで、この様な意志を持つ人が多いために、貴重な動植物の絶滅に拍車をかけることになるので、これは動植物研究者並びに一般採集者等の、自粛を要する点であろうということも悟った・・・

「野の鳥の思い出」

・私は標本を頭の中に入れてあります。敢えて無味乾燥な標本などをしまっておくよりも、野外に出れば生きた標本が居りますし、又生々とした姿や色は絵に残しておけます。だから私は標本など持たないのです。

「野鳥」102 号

「観察の機会」

ある種の鳥を観察中、他のそれよりも価値の多い珍鳥が出現する様なことがあるから、鳥を観察するのに熱心なことが必要であると同時に、寸分の油断があってはならぬのである。これは昔の名剣士が、一時に数人の敵を相手として真剣勝負をしている時の気の配り方と同様であると思う。

鳥類は飛ぶのが速いとか、保護色のため見付かり難いことがあるとか、或は隠潜性に富んだものがある等によって見聞の機会を逸し易いものであるが、周到に注意してさえ居れば、其機会は案外多いもので、簡単な郊外散歩の時とか、室内に居ながら空を眺めている際にでも、意外の見聞ができる場合があるから、ハイキング、登山、郊外ドライブ、汽車、電車、船舶等による旅行などの途中は、油断なく耳目を働かし、又旅行先でも好機を逸しない様に絶えず注意して居る必要がある。而して常に鳥の声を耳にし、姿を目に入れることに意を用いる習慣がついて来ると、遂には特に気をつけていなくても、鳥が一声鳴けば直に耳に入り、一瞬間姿を現せば直に目に映じ、尚一層進めば、夜間睡眠中にでも、高空を飛んでいる渡鳥の声に目を醒ます様にさえなる。

上記は野鳥便覧上巻の総説「観察の機会」の一節である。これこそ榎本自身の探鳥スタイルそのものが書かれたものと言える。

老齢を忘れ昼間灼熱の砂洲に立ちつくし水禽のむれを見る姿、真夜中に渡り鳥の声を聞いてがばと起きる姿、電車に乗っても座ることをせずに、窓の外の鳥を双眼鏡で追う姿、生涯鳥を追い続けた榎本の姿が、鮮明に浮かび上がる。

榎本佳樹をめぐる人々

榎本は、昭和 18 年の野鳥誌に、「鳥のおかげ」として、野鳥研究に関する交際等について書かれている。内田博士のおかげで、川村教授や川口孫治郎氏、大阪支部長の森田博士とのつながりができたこと。中西悟堂氏のおかげで、世間に知られるようになり、多くの人から称賛されるようになったことなど感謝の気持ちを述べられている。他にも多数の方の名前を挙げられているが、ここでは特に関係の深かった方のみを紹介する。



榎本佳樹 1873～1945 年
写真は 1938 年、65 歳当時

【日本野鳥の会】1934（昭和 9）年、中西悟堂が創設

中西悟堂　1895～1984 年



思想家、歌人、詩人、天台宗僧侶
- 悟堂が編集する機関紙「野鳥」に榎本が数多くの記事を執筆。
- 悟堂の「野鳥ガイド」（1938 年発行）のワシタカ類の解説は榎本が担当。
- 「野鳥」102 号榎本佳樹古希記念号の発行。悟堂作の詩「榎本佳樹翁」を掲載（自身の詩集「叢林の歌」にも収録。）
- 雑誌「文芸春秋」（1942 年 11 月号）に「野鳥を追う人々」として悟堂が榎本のことを詳しく紹介。
- 「野の鳥の思い出」の出版を悟堂が企画・実現

【鳥類学者】

内田清之助（うちだせいのすけ）　1884～1975 年



農林省林野局猟政調査室技師から東大、京大、東京高農などの講師を歴任。鳥類関連の著書を多数発表し、鳥学の発展と野鳥の保護に大きく貢献された。

「野鳥便覧」上巻の序文を執筆



川村多実二（かわむらたみじ）

1883～1964 年

1936（S11）年、日本野鳥の会関西支部（後に京都支部と阪神支部に分離）創立に伴い初代支部長に就任
・『鳥の歌の科学』（1947 年）発行
京都帝国大学教授・生物学
比叡山の鳥類保護に尽力

内田と川村の写真は、1936（S11）年 3 月 15 日、野鳥の会の大阪講演会でのもの＝日本野鳥の会が大阪進出した日

【在野の野鳥研究家】

川口孫治郎（かわぐちまごじろう）　1873～1937 年



和歌山県出身、榎本と同い年。
野鳥の声の「ききなし」を提唱。著書に「日本鳥類生態学資料」「自然暦」。
農林省の鳥獣調査嘱託者会議の際に同宿し、川村、榎本の三人で鳥談義に夜を明かしたということも。

小林桂助（こばやしけいすけ）　1908～2000 年



1939 年神戸支部独立時の神戸支部長
榎本とは鳥類研究上の手紙を交換。
野鳥の会の講演会や探鳥会でも交流。

※大阪支部が保管している「野鳥便覧」は、小林氏のご遺族から 2001 年に寄贈いただいたもの。

安部幸六（あべこうろく）　1881？～1961 年



福岡鳥の会（大正 10 年発足）理事や後に会長を務め、鳥類研究や保護活動に尽力。有明海でのシギ・チドリ観察や英彦山などの探鳥に榎本を案内。同氏からの依頼で榎本が標本（羽皮）を鑑定し、日本初記録のこの鳥にヒメノガンという和名を命名した。

【日本野鳥の会大阪支部】阪神支部 1937（S12）年発足



森田淳一　初代支部長（大阪高等学校教授、生物学）

野鳥便覧上巻の発行を全面的に支援。樺太探鳥旅行同伴。



守山鴻三（＝守山白雲）初代幹事（自宅を事務所に）

阪神支部の創設に尽力。初代幹事として支部の揺籃期を支えた。

※白雲と号して随筆などを野鳥誌上で発表。1959 年には湘南支部設立。大阪支部には氏直筆の「百舌鳥耳原風景」と題したモズの絵が現存。



平松道夫（第 2 代幹事）

第 1 回箕面探鳥会（1937.314）で初めて榎本に会って以来、探鳥会の度に随行し、榎本の直接の指導を得て、師と仰ぐように。

2 ページの追悼文を読めば榎本をいかに尊敬していたかが分かる。



岡田康稔（改名前は岡田稔）（第 2 代幹事）

大毎野鳥の会主催の岩湧山探鳥会（1937.7.18）で初めて榎本に会って以来、機会あるごとに榎本の指導を受ける。1942 年、本部幹事となり、悟堂のもとで「野鳥」誌編集等に携わる。

※後に大阪府の初代の鳥獣保護員として活躍された。



堀田光鴻（第 3 代幹事）本業の傍ら野鳥生態画家として活躍

「親子のように私の家族とも親しくして頂き、幼少の時父を失った私には一しおなつかしく思える。」　**「野鳥」102 号「榎本先生の古希を祝して」から。一方、榎本も「鳥のおかげ」の中で、家も近く、堀田氏と一番お会いしている回数が多いと書いている。**

※1940 年大阪ガスビルで野鳥生態画展覧会、翌年神戸大丸で個展開催



藤原廣蔵（第 4 代幹事、後に第 2 代支部長）

野鳥便覧下巻の発行を金銭面で支援。榎本とは、探鳥会の他、日本アルプスへの探鳥などに同行。

※戦後の大阪支部を平松道夫、岡田康稔の両氏とともに復興、発展させた。1987 年、野鳥保護の功績で勲五等瑞宝章授与。



山崎静子（歌人）　榎本のことを父のように慕っていた一人

大淀の川べに君が聲作るホウロクシギの音色しみじみ
空仰ぐするどき瞳チウヒとぞーことの間に和みけり師は（なご）

「野鳥」102 号　榎本佳樹先生の片影　から

【大毎野鳥の会】



山口勝一　大阪毎日新聞社事業部長　1943 年　43 歳で病死

大毎野鳥の会の主宰者で、野鳥の会とタイアップし探鳥会などを企画実施。大阪支部のため側面から尽力された。

榎本は野鳥誌の故山口勝一氏の追悼文の中で、箕面の山地でのやりとりを次のように回想されている。･･･そうすると山口氏は例の快活な口調で「左はヤブサメ右はヒヨドリ」と唱えてにこにこしている。次に何を言うのかと待っていると「中をとりもつヒカリヌス」と付け加えて、愉快そうに笑っておられる。これは私の頭の髪が少なくなって光っていることから思いつかれた一句で、･･･その一句を無邪気な罪のないものと快く思って、共に大笑いをした･･･**「野鳥」109 号から　両人の交友関係がうかがえる一コマ**

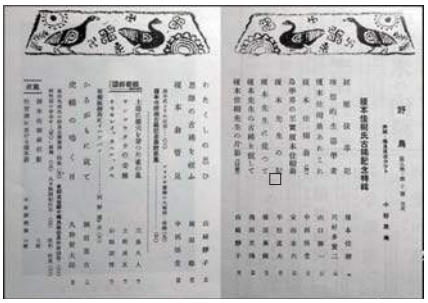
「野鳥」誌と榎本佳樹

当時の「野鳥」誌（昭和 9 年発刊から昭和 19 年 9 月までに発刊された全 115 号）への榎本の掲載論文（短報や紀行文等含む）数は、75 本にものぼります。
中でも野外識別が困難とされるワシタカ類とシギ・チドリ類の識別講座や「鳥類思出記」の連載などから、榎本の野鳥研究歴の長さと野外識別の実力が傑出していたことが分かります。

「野鳥」一冊まるごと榎本佳樹

「野鳥」誌 102 号（昭和 17 年 11 月号　下写真は同号目次）が榎本の古希記念特集号として発行されています。榎本と親交の深い大阪支部の皆さんが多く執筆されています。

目 次　経歴抜粋記：榎本佳樹、理想的生態学者：川村多実二
榎本佳樹翁あれこれ：山口勝一、榎本佳樹翁（詩）：中西悟堂
鳥学界の至宝榎本佳樹翁：安部幸六、榎本先生の記：平松道夫
榎本先生に従って：藤原廣蔵、榎本先生の古希を祝して：堀田光鴻
榎本佳樹先生の片影（短歌）、わたくしの思い：山崎静子
恩師の古希を祝う：岡田 稔
榎本翁管見：中西悟堂



※中西悟堂による詩は大阪支部ホームページの榎本佳樹生誕 150 年記念事業特設サイトの「榎本佳樹と中西悟堂」の資料で閲覧可能です。

榎本佳樹氏古希記念祝賀会　平松道夫記 昭和 17 年 12 月 4 日

森田支部長より榎本氏の古希を祝するに至った経過報告と共に今日まで野鳥のために尽くされた功績に対して感謝の辞ありたる後、会員並び有志より寄付ありたる金額をもって購入したる記念品に研究費を添え贈呈ありたり。

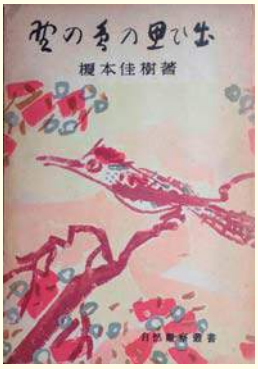
榎本氏より謝辞に次ぎ今後益々健康に留意し生命の続く限り野鳥界に尽瘁（じんすい）致したしとの挨拶ありたる後、記念撮影を済ませ懇談に移る。席上「榎本氏と歌謡曲」という妙な鳥合わせの題に付き当の榎本氏より説明を受けてはじめて想いを又新たにした事であった。

榎本先生が歌謡曲、特に一丸とか勝太郎とかいう人達の歌を傾聴される所以は凡人の計り知れざるところにある事が初めて明るみに出た。先生は野鳥の写生をよくされるが、細く鋭い鉛筆を尚も入念に削って描かれる際、野鳥の頭部や胸部等は極めてデリケートなものでわずかな線の相違により鴫とも見ゆれば千鳥ともなるし又鳥の個体という点から科学的に測定すれば勿論若干の差異は見受けられるがそうした意味ではなく例えば雀を描かれる場合嘴の角度とか全体に対する尾の長さ、翼の工合とか言う点に雀でなければ見出し得ない線を見出して描かれるよしで、頭にはそうした概念が、焼きついていても線となって現すための苦心は並大抵のものではないとの事である。その苦心が勝太郎や一丸独特の歌い方の苦心に一致するものがあり、単に歌謡曲として聴き逃さず、あの人達があの歌をああ言う工合に歌いこなす為には過去に相当の精進があった事でもあろうし、又歌っている瞬間においても苦心しているであろうと言う芸術家ならでは体得し得られない微細な感情を交錯させて聞かれる由である。今日迄発表の絵はこうした精進と良心を以って描かれた生態画であったかと列席者一同先生の生態画に対する敬服の念を一層深め散会した。　「野鳥」106 号（昭和 18 年 3 月号）から

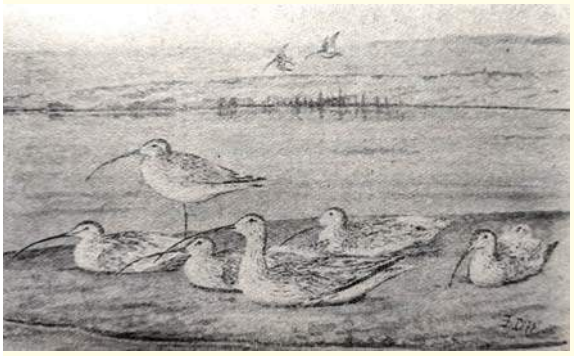
※寄付金 830 円が集まり、内 784.3 円が研究費として贈呈された。

榎本佳樹クイズの答え　①クサシギ　②ササゴイ

『野の鳥の思い出』



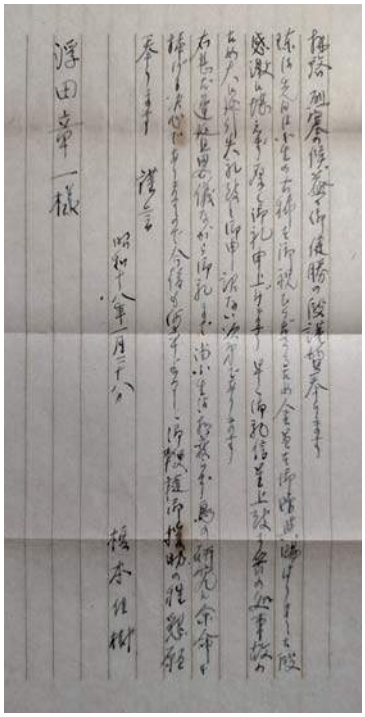
野鳥誌に連載した「鳥類思出記」の記事を一冊にまとめたもの。
ワシタカ類やシギ・チドリ類の野外識別の方法、さらに巻末にはシギ・チドリ類の測定表が付いている。
（日新書院 1942 年）
B6 版 416 ページ
戦時中の出版ということで、紙質が悪く、自筆の鳥の絵がモノクロで収録されていますが、原図の美しさを伝えることができていないのは残念です。



腹ばい休息するダイシャクシギ　住吉浦

なお、大阪支部では 1 冊を蔵書、保存していますが、本の経年劣化が著しく閲覧していただける状況ではありません。本書については、講談社が 1983 年に発刊した『全集日本動物誌 16』に復刻収録されていますので、図書館での閲覧が可能であり、また古本で買い求めることもできると思います。

榎本が寄付者に宛てた直筆の手紙



寄付へのお礼の言葉の後に、「尚小生は相変わらず鳥の研究に余命を捧げる決心でありますので今後も何卒よろしくご鞭撻ご援助の程懇願奉ります」と結んでいる。昭和十八年一月二十八日に書かれたものである

ヤフオクで落札した「野の鳥の思い出」にはさまれていた手紙。寄付のお礼に「野の鳥の思い出」を謹呈する際の手紙。宛先の浮田章一氏（故人）は、国文学者で野鳥の会会員。著書に「鳥・鳥・鳥そのエッセイ」（1984 年）など。昭和 22 年、国鳥をキジと定めた際の選者の一人。榎本を追うことで、また新たな人との出会いが･･･

榎本佳樹 ゆかりの地（大阪周辺）



六甲山	探鳥会
小野の来住池	探鳥地

大阪

箕面山	探鳥会、中西悟堂と探鳥
山田池	探鳥会、中西悟堂と探鳥
淀川河口	調査地・探鳥会、中西悟堂と探鳥
住吉浦	調査地・探鳥会
仁徳天皇陵	調査地
仲哀・応神天皇陵	調査地、中西悟堂と探鳥
生駒山	探鳥会
岩湧山	探鳥会　中西悟堂と講演と探鳥
久米田池	調査地

京都・滋賀

比叡山	探鳥会　川村多実二、中西悟堂と探鳥
巨椋池	探鳥地
琵琶湖	探鳥地

奈良

吉野山	探鳥会
大台ケ原	探鳥会

和歌山

高野山	勤務地（高野山中学）・調査地

※網掛けは、足跡をたどる探鳥会を開催済の場所

榎本佳樹の足跡をたどる探鳥会

榎本佳樹の足跡をたどる探鳥会を本年 1 月から 7 月までの間に以下のとおり計 7 回実施しました。

大阪支部のホームページ「榎本佳樹生誕 150 年記念事業特設サイト」に報告を掲載しています。当日の配布資料などについてもご覧いただけます。

第 1 回 1 月：山田池、第 2 回 2 月：古市古墳群探鳥会　特別 4 月：有明海、第 3 回 5 月：比叡山（京都支部と共催）第 4 回 6 月：岩湧山、第 5 回 6 月：箕面山　第 6 回 7 月：高野山（和歌山県支部と共催）

■1 月 14 日（土）山田池　鴨を楽しむ探鳥会　参加者：8 名　33 種　むくどり通信 No.277（2023 年 3 月）P15 に報告済

オシドリ、トモエガモ、ミコアイサなど計 33 種を確認。

【榎本佳樹が活躍した時代　大阪支部では鴨場見学を兼ねた新年宴会を開催】

・昭和 14 年当時、約 10 万羽ともいわれるトモエガモの飛来が記録されたという山田池。当時、大阪支部では山田村村営の鴨場見学会を兼ねた新年宴会を開催し、山田池のカモを見て帰途、付近の料亭「魚富」で鴨料理の宴会をしていたということ。当時の行事予告（「野鳥」昭和 13 年 1 月号）には、阪神支部主催 山田池鴨猟を兼ねた新年宴会として正月 9 日の開催についての案内が掲載されています。

「鴨並に山田池付近の野鳥実地指導は榎本指導員が当たります。但し鴨は人の姿や声に敏感ですから、鴨池での談笑 は御遠慮のこと。懇話会 鴨スキ、鴨雑炊等、料亭なら一日十円を要しますが、今回は農家の奥座敷利用野趣を旨とします。受付人員 五十名厳守」とあり、当時の人気行事であったことがうかがえます。



大阪府北河内郡山田池鴨場
昭和 14 年当時の山田池

■2 月 18 日（土）古市古墳群探鳥会　参加者：11 名　36 種　むくどり通信 No.278（2023 年 5 月）P15 に報告済

ミコアイサやゴイサギなど計 36 種を確認。

【大阪市近郊の半日　来阪した中西悟堂と仲哀天皇陵周辺を探鳥】

・大阪支部（当時は、阪神支部）の発足前日にあたる 1937（昭和 12）年の 2 月 18 日、中西悟堂と榎本佳樹が古市古墳群周 辺を探鳥した記録が「野鳥」誌（昭和 12 年 4 月）に悟堂の紀行文「大阪市近郊の半日」として掲載されている。当時中西悟堂 41 歳、榎本佳樹 63 歳、まだ仲哀天皇陵周辺は住宅もまばらで、のどかな田園風景が広がっていた。

・1937 年 2 月 19 日は中西悟堂が阪神支部発足会に出席、榎本が記念講演（写真）。

※阪神支部は、昭和 14 年に神戸支部が分離し 大阪支部に改称



支部の創立記念日は 2 月 19 日

■４月 18 日（土）有明海探鳥会　参加者：12 名　53 種

大阪支部としては初めての東よか干潟探鳥会、少し風は強いが晴天。広大な干潟にハマシギやチュウシャクシギ、ダイゼンなどをはじめとするシギ･チドリがゴマを散らしたように多数群れ、ツクシガモやズグロカモメ、クロツラヘラサギなど有明海の干潟を代表する鳥たちに加え、越冬していたアカツクシガモ♀1 羽がまだ見られた。夏羽のきれいなオオハシシギや真っ黒なツルシギの小群なども楽しめた。9 時半過ぎから午後 2 時頃までの 4 時間あまり、最後は潮が引いて鳥との距離が相当遠くなったが、シギ・チドリ 19 種を含め 53 種を確認できた。今から 86 年前に榎本佳樹らが観察した頃と変わらないであろう有明海の干潟と鳥たち。ここはシギ・チにとって本当にかけがえのない場所だと実感できた。

【86 年前のシギ・チドリの観察】

・今から 86 年前の 1937 年 4 月に榎本佳樹や森田初代大阪支部長といっしょに有明海の干潟に探鳥に船で出かけ潮が引いたために長時間干潟に立往生しながらも、しっかりとシギ・チドリの観察を楽しんだ様子を福岡の鳥類研究家の安部幸六氏が振り返り野鳥誌に寄稿している。



■５月４日（祝）比叡山探鳥会　参加者：42 名　31 種

榎本佳樹生誕 150 年、川村多実二生誕 140 年記念と銘打った京都支部との共催探鳥会。大阪支部からは 24 名、京都支部からは 18 名の計 42 名が参加。

最初にケーブル比叡駅近くで京都支部の坂根副支部長から比叡山での榎本、川村、そして中西悟堂の 1939 年、1940 年当時の探鳥会の様子が紹介された。

納家支部長から配布資料の「比叡山初夏の鳥」についての説明があり、昭和 17 年発行の猪川城（いかわせい）著「野鳥雑記」の付録としてイラストと鳴き声などが書かれた貴重な資料（右図）であることが紹介された。

京都支部（大阪支部の会員でもある）の堀尾岳行さんの案内で探鳥を開始。キビタキやホオジロ、クロツグミ、センダイムシクイ、ミソサザイなどのさえずりを楽しむ。他、カケスやヒガラ、ヤマガラなどの姿も。

昼食後に川村多実二の歌碑と中西悟堂の歌碑を見学。悟堂の歌碑を囲んで記念の集合写真を撮影。浄土院の近くでは途中遅れたグループがキバシリの巣立ち雛を連れた親子を観察。ケーブル延暦寺近くでは琵琶湖をバックに飛び回るイワツバメの姿を観察。案内役の堀尾さんは野鳥だけでなく植物や京都の山の名前、比叡山の歴史などの解説もされ、皆さんに大好評。最後に大阪支部の参加者全員で案内していただいた京都支部の皆さんに感謝をこめて拍手。探鳥会終了後は JR 坂本駅近くで両支部の有志 11 名で懇親会を開催し、交流を深めた。



比叡山初夏の鳥
（裏面には鳴声の解説付き）
当時の京都支部が作成した
貴重な資料



1939 年 5 月 28 日釈迦堂前の川村（左）と榎本（右）
中西悟堂撮影



川村多実二の歌碑

時ならぬ
つばきの花を
よろこびて
目白友よぶ
山かげの寺

※探鳥会の配布資料は大阪支部 HP の榎本佳樹特設サイトで公開中、ぜひご覧ください



■５月 17 日（水）岩湧山・岩湧の森探鳥会　参加者：32 名　31 種

河内長野駅からの南海バスには 31 名乗車の全員が探鳥会参加者という完全貸切状態。南青葉台口で下車し、バス停前の建物で営巣中のコシアカツバメを早速観察。一同岩湧の森を目指し探鳥開始。途中道沿いの小さな流れでカルガモやカワガラスを確認。キビタキ以外に鳥のさえずりは少なかったが、岩湧の森に入ってようやく近くでミソサザイのさえずりが聞かれ、姿もなんとか確認。いわわきの森・四季彩館で昼食中に、コサメビタキが近くの木に飛来。さらにクマタカが上空を舞い、鉄塔に止まるのを観察。すこししてもう 1 羽が同じ鉄塔の上部に飛来、スコープで参加者全員が姿を楽しむことができ非常に幸運であった。

昼食後には、榎本佳樹が昭和 12 年に 200 余名の聴衆を前に講演を行った岩湧寺に。当時の探鳥会の様子を納家支部長が紹介した後、お寺の前で記念撮影。帰路は岩湧寺の長寿水で喉を潤し、今年一番の暑さに負けずに皆さん元気に往復約 12 キロの道のりを踏破。

支部創設当時探鳥のメッカとして知られていた岩湧山での久しぶりの探鳥会、鳥の数は決して多くはなかったが、岩湧の森の美しさとクマタカとの出会いは皆さんの心に深く刻まれたものと思う。



■6月 18 日（日）箕面山探鳥会　　参加者：25 名　33 種

84 年前の 1939 年 6 月 11 日に行われた箕面山探鳥会では 22 種の野鳥が観察されていたが、今回はそれを上回る 33 種が確認できた。

駅から歩いてわずかな時間で渓流や森の鳥を観察できる箕面は当時も今も大阪支部にとってとても貴重な探鳥地であることを改めて強く感じたところ。減少傾向にあるオオルリのさえずりが最低 8 ケ所で聞かれ、姿もよく観察できた。期待していたサンコウチョウやヤブサメ、センダイムシクイのさえずりも聞くことができた。当時とは異なりサンショウクイはリュウキュウサンショウクイに置き換わり、滝の上の道からははるか遠方のマツの樹上の巣に止まるミサゴの姿をスコープで観察。勝尾寺の近くまで来てようやくウグイスのさえずりが聞かれ、あわせてホトトギスの鳴き声も。勝尾寺近くの空き地で納家支部長が当時の探鳥会の様子を紹介し、久下幹事が鳥合わせと箕面の初夏の鳥のさえずりについて説明。その後、バス停近くで記念撮影をして解散とした。

1939 年 6 月 11 日の箕面山探鳥会の参加者は 80 余名。東京から 中西悟堂、大阪支部からは森田支部長、榎本指導員、堀田幹事等が参加。榎本による野鳥愛護の講演とあわせ、勝尾寺境内に野鳥愛護を訴える看板の設置も行われた。



■7月 16 日（日）高野山探鳥会　参加者：52 名　16 種

和歌山県支部との共催探鳥会。梅雨明けを思わせる快晴の下、大阪支部からは 31 名、和歌山県支部からは 21 名が参加。冒頭和歌山県支部長の中西さんから高野山のブッポウソウにまつわる興味深い話があった（下囲み記事参照）。

連休中ということで観光客が多く、奥の院まではキセキレイ以外ほとんど観察できず。御供所の軒下にぶら下がっている風鐸の内部につくられたミソサザイの巣もすでに巣立後で姿や鳴き声も聞かれなかった。奥の院から三本杉まで歩きここで昼食。時期的にも鳥のさえずりが少ない中、当地の自然に詳しい中村進さんの昆虫や植物についての詳しい解説が好評だった。湿地帯やスキー場などを回り午後 3 時前に集合場所にもどり、全員で記念撮影の後、納家支部長から榎本佳樹が高野山中学の教員だったおよそ 100 年前の鳥の記録や榎本のブッポウソウの保護（※1925 年当時はブッポウソウが夜に「仏法僧」と鳴くと信じられていた時代）についての思い等の紹介のあと鳥合わせを行った。観察会開始前に見られたキバシリや鳴いていたカッコウ、アカショウビンなどは観察会では残念ながら記録できず、種数は 16 種と少なかった。

最後に大阪支部の参加者全員で案内していただいた和歌山県支部の皆さんに感謝をこめて拍手。
解散後希望者のみで高野山高校に行き校舎に多数営巣中のコシアカツバメを観察した。



◎高野山中学校教員時代の榎本佳樹

榎本佳樹関係の文献などが残っていないかを高野山高校にお願いして調べていただきました。

・学友会資料「三密」（1925 年発行）には「高野山の鳥類に就いて」と題して高野山で見られる鳥やブッポウソウの保護について詳しく書かれています（配布資料）。

・学園回顧録からは当時の様子がうかがえます。

「植物担当の沼尻先生や鳥の研究で有名であった榎本先生などに珍しいお山の植物や鳥についての実地指導をしていただいた。又、お大師様の詩にある有名な仏法僧の声を聞くために生徒諸君と共に静寂そのものの夜の奥の院や大門にもよく出かけたものであった。ほんとうに大自然のふところに抱かれた様な純な気持ちになって、自然科学の原理を味わい、自然の神秘感に打たれて日々を過ごしたのであった。」

「学園回顧録」（1956 年発行）高野山高等学校より

〝三宝鳥は霊山・高野山のシンボルの鳥　　和歌山県支部配布資料から

「仏・法・僧」と鳴き、かつては高野山では三宝鳥と称され、霊鳥として崇められた鳥。空海も漢詩に有り難い鳥として謳われていて、比叡山など各地の深山幽谷の霊山に棲む鳥として人々から広く崇められていた。昼間はブッポウソウを見て、夜はコノハズクを耳にしていた時代、榎本佳樹先生もそのお一人だったのでは？



高野山高校の校章は三宝鳥の羽根をモチーフにしている。高野山中学校と同じ図案、中⇒高に変更。作者は・・・？



〝江戸時代の三宝鳥〟
夜には仏・法・僧と鳴くとされていた。法は仏の教え、僧は教えを伝える人。





〝仏・法・僧〟は、空海がつくった日本で最初の聞きなしとみられる。

うれしいニュース

高野山中学の校章は、和歌山県支部長の中西正和さんの推察どおり、榎本佳樹の発案だったことが判明しました！

高野山高校の校長橋本直人さんから、「高校風土記」に、その記述が残っているのを確認できた旨、連絡をいただきました。当時の校旗は現存しているとのことで、企画展での現物展示にもご協力いただけることになりました。

日本野鳥の会と榎本佳樹

榎本佳樹にとって、日本野鳥の会がどのような存在であったのか、「野鳥」第 100 号記念特集に榎本が寄せた「野鳥の会の回顧」（以下全文）に、日本野鳥の会の活動や「野鳥」誌への思いが読み取れます。

野鳥の会の回顧　　榎本佳樹

一億の日本人中、鳥類愛護の必要なことに気のついている人は、多くとも一千人位で、殊にその中で、鳥類を人間の精神陶治上有益なものと認めて、人類永遠の幸福のため、保護に努めなければならぬという考えを持っている人は、多分百人にも達しないであろうと、私は常々思うているので、昭和九年の五月、中西氏から「野鳥」創刊号の恵送を忝うした時、一時は意外な感じがした。それは、我国人の殆ど全部に近い大多数が、熱心な鳥類獲殺者と、鳥類に絶対無関心な者とから成っている様な状態の中で、「野鳥の会」をこしらえたり、機関雑誌「野鳥」を発行したりするなどは、あたかも小舟を操って激流を遡る様な、難事であろうと思うたからである。が、「野鳥」をよく見ると、主幹である中西氏が申し分のない適任者であり、又賛助員は、我国諸方面の第一流名士を網羅しているので、これならば「激流を遡ること」ができようと、信頼の念が起こると同時に、自力では実行不可能と諦めていた私の希望が、「日本野鳥の会」ができたため、実現されることに多大の喜を感じて、早速入会さしてもらったのである。

「激流を遡る小舟」は、その後幾多の困難と戦いながらも、着実に進行して、数年後の「野鳥」に「・・・機関雑誌「野鳥」も大方の熱烈なるご声援の下に健全な発達を遂げて・・・」という、『日本野鳥の会』趣旨が掲げられるようになり、又実際においても、従来新聞雑誌などに、野鳥に関する記事は殆ど絶無に近い形であったのが、極めて僅少ながらもそれが見られ、ラジオの鳥声放送は頻繁に聴くことができ、野鳥に関する講演会や、野鳥観察のハイキング等も盛になって来たが、これ等は何れも『日本野鳥の会』の真摯な運動の反映に外ならぬので、私は第一線の先頭に立って勇戦奮闘を続けて居られる中西氏その他の方々に対して、満腔の感謝を捧げる次第である。

支那事変と、それの拡大された大東亜戦は、我国の存亡興発に関する大戦争で、我々は何をおいても全国力を賭して、最後の完勝を得ることに努力せねばならず、それがため如何なる困難をこうむることも、覚悟して居らねばならぬのは勿論であるが、兎に角今次の大戦争は、『日本野鳥の会』発展途上の一大難関であることに間違なく、殊に「戦争最中の時代に鳥の研究などとはけしからん」という様な考えを持つ人ができて、野鳥観察をしたり、鳥類愛護に関する研究をしたりなどしていることを一種の反戦行為であるかの様に解して居ることは甚だ遺憾である。私は種々な原因のため、兎角人心の荒み勝な戦時においては、特に情操教育に重きをおくことが必要であると思うのであるが、『日本野鳥の会』も、相変わらず如何なる障害をも突破して、勇敢に進展を続け、更に、「激流を遡る小舟」は、従来漕手と舵手を兼ねた只一人で操縦していたのが、最近有力な援助者を得て、二人で操縦することになったのは、まことに心強く末たのもしい限りである。しかしながら、激流の長さは殆ど無限に近く、水量も流速も共に加わることと予想されるので、将来も無事に堅実な進行を続け、究極においては、逆流が順流に変る時代の到来する様、祈ってやまない。

『日本野鳥の会』は創立以来日々に隆盛を加え、会員も増加する一方で、全国の諸所に支部の設立を見る様になり、昭和十二年には阪神支部が出来て、同十四年五月にはその中から神戸支部が生れて分離したなど、何れも会が盛大になった證據と見るべきで、慶賀に堪えない次第である。又大阪支部は、阪神支部時代から森田支部長の懇切な指導、守山、平松、岡田、堀田等代々の幹事諸氏の熱心な斡旋と撓まざる活動等の御蔭で益々盛栄を加えつつあることは欣幸の至りで、只近年鳥類の棲住地や繁殖場所が、急激な速度で覆滅され、且一般に鳥類も激減して、我々の活動範囲が日々に縮小されるなど、「激流を遡る小舟」も、ここでは殆ど押し流されそうになっていることを遺憾とする。

雑誌「野鳥」の創刊号から本年 7 月号までの全重量がどれ位あるか量ってみたら、約三貫八百匁（※1）余あった。この重量は日本産鳥類の最大種であるハゲワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、ガランチョウ、タンチョウ等の、何れも一個体よりも重く、凡そマナヅルの大形個体二羽分、マガンの六羽分、スズメの六百五十羽分に、それぞれ相当し、キクイタダキなら二千五百三十羽分に等しくなる。又積み上げた高さは一尺五寸（※2）で、これは立っている鳥の高さとしては大したものでなく、凡そダイシャクシギ位のものである。尚現在の容積は大きいとは言えないが、それでも私の宅では相当の場所を占領することになるので、鳥に関係のない雑誌ででもあれば、ある程度の虐待を受けて、押入の奥か物置棚の隅っこにでも、敬遠されている筈の所、粗悪な書架ではあるが、その一等席に納っていて、而も私が今後尚可なり長生きをしても、その間に殖える予定の、後続号の座席まで準備してある。

注　※1　約 14.25kg　※2　約 45cm



戦時中で、野鳥の会の活動が非常に困難になってきている状況や大阪では鳥の生息地の急速な破壊が進み、鳥が激減していることを嘆いている。
「野鳥」誌のバックナンバーの容積（重量や積み上げた高さ）を鳥類の大きさに比較しているところも、いかにも榎本らしい。

「野鳥」100 号記念特集（昭和 17 年 9 月号）は「南方共栄圏の鳥」占領下の南方共栄圏の野鳥を初めて特集したもの

榎本佳樹の生涯　略年譜

調査・作成　納家　仁　　（1／4）

元 号	西暦	満年齢(年末)	月 日	出来事（野鳥に関するエピソードなど）	出 典
明治 6	1873	—	11 月 5 日	徳島市に生まれる。幼少時は非常に病弱で、小学校に入るのが遅れたほど。15 歳の年、兄の狩猟に付いて出かけるようになり、その後一人で野外に鳥を見に出かけるようになり、徐々に健康体となる。徳島、吉野川河口付近で探鳥。明治 20 年前後の頃まで**トキ**を観察、**オオワシ、オジロワシ**　徳島付近の海辺でしばしば出会う。	野鳥S17.11月号 野の鳥の思い出
明治 27	1894	21 歳	**日清戦争 1894 年 7 月 25 日から 1895 年 4 月 17 日　遼東半島、台湾、澎湖諸島が日本の領土に**		
			12 月 1 日	士官候補生試験合格、丸亀歩兵隊に入隊　軍人生活が始まる	野鳥S17.11月号
明治 29	1896	23 歳		陸士卒業	
明治 30	1897	24 歳	6 月	少尉任官	
明治 34	1901	27 歳	4 月	澎湖島赴任　船旅（高知県須崎から澎湖島への 7 日間）　**カツオドリ、ヒメクロウミツバメ、アナドリ、ハイイロミズナギドリ、オオミズナギドリ**など	野の鳥の思い出
			10 月中頃	澎湖島　澎湖島で**サシバの渡り**　6 日間で総計 200 羽近く	
明治 35	1902	28 歳	2 月下旬	澎湖庁から諸島巡視の汽船に便乗　猫嶼（ねこしま）で**アホウドリ多数繁殖**　親鳥を採集	野の鳥の思い出
			4 月	澎湖島　**コシャクシギ** 4、500 羽が 10 日余り滞在　沢山採集	
			5 月～	台湾本島赴任　**オオチュウ、シロガシラ、ベニバト、カーレン、バンケン、カノコバト、レンカク、ハイイロチュウヒ、タイワンクマタカ、オオカンムリワシ、タカサゴモズ**などを観察	
明治 36	1903	29 歳	5 月下旬	台湾本島から内地へ帰還	
明治 37	1904	30 歳	**日露戦争 1904 年 2 月～1905 年 9 月　日露戦争後のポーツマス条約で、樺太（サハリン）の北緯 50 度以南の部分が日本の領土に。**		
明治 40	1907	34 歳	春	高知市東北地方の山地　3 ケ月　「**ホトトギス**の夜間啼鳴について」	野の鳥の思い出
			9 月初～	朝鮮（北朝鮮）に 6 ケ月滞在　特殊任務のために下僚一人、通訳一人と三人で冒険的旅行　トロッコからの転落　奇跡的に無傷、双眼鏡や猟銃も無事	
明治 41	1908	35 歳	～1 月末	**・コウライウグイス、オオカラモズ、イヌワシ**などを観察 ・夜間、馬賊が銃撃してきたおかげで飛び立った**イカルチドリ**の声を聴いて豆満江に**イカルチドリ**の生息を確認。	
明治 42	1909	36 歳	12 月初～	満州（大連湾の北岸）に赴任　守備隊中隊長　　日本動物学会（当時の東京動物学会）に入会 **コクガン、ツクシガモ、アカツクシガモ、アカアシチョウゲンボウ、ノガン、チャバラアカゲラ、イヌワシがナベヅルの群を襲う**などの観察　※「ブレーム動物書」（1900 年版）の図版で見て覚えのある**ノガン**との記載　　榎本がアルフレッド・ブレームにより 1860 年代から出版された動物事典を参照していたことが分かる	野の鳥の思い出
			12 月	大連湾で**コオリガモ**を採集　随伴者が寒中水泳で鳥を回収	
明治 43	1910	37 歳	春	満州　南関岑（なんかいれい）の某所で**ヤツガシラ**を観察。鳥類を採集する度毎に、予めその鳥の棲住数の多少、繁殖力の強弱及び繁殖の時期等に関して、従来よりも一層深く考慮するようになった。※初めて**ヤツガシラ**を見て、人を恐れない性質と、奇抜な形や色彩などに接し、尚以前から希少な鳥であることを知っていたこと等によって	野の鳥の思い出
明治 44	1911	38 歳	春	新京（当時の長春）方面へ要務のため旅行。鳥体研究のため、**ヤツガシラ** 2 羽を採集　※採集は止むを得ず心苦しい限りと回顧	野の鳥の思い出
			4 月	内地に帰還　香川県丸亀市　丸亀にて鳥類の実地研究	野鳥S17.11月号
			5 月	予備役に入り、軍人生活を離れる	
明治 45	1912	39 歳	1 月	徳島へ移住　徳島市常三島（じょうさんじま）町　徳島にて鳥類の実地研究	
			5 月初め	剣山行、帰路に東宮山、焼山寺山を探鳥　　穴吹川や木屋平川等渓流に沢山の**カワガラス**、山頂付近の原始林には**コマドリ**多数	野鳥 S18.3 月号
大正 2	1913	40 歳		徳島地方で**キバシリ**採集　四国初	動物学雑誌

※榎本佳樹の略歴については、「野鳥」102 号（昭和 17 年 11 月号）のご本人による「経歴抜粋記」以外に資料がなく、「野鳥」誌等の記事から情報を拾い集め、年譜としてまとめた。「野鳥」誌の連載記事等から「野の鳥の思い出」に収録されたものについては、出展は後者とした。なお、ご家族のことなど個人的な情報については、ほとんど資料がなく調査が及ばなかった。

元 号	西暦	満年齢(年末)	月 日	出来事（野鳥に関するエピソードなど）	出 典
大正 3	1914	41 歳	7 月	**第一次世界大戦　1914 年 7 月 28 日 - 1918 年 11 月 11 日**	
大正 4	1915	42 歳	1 月 15 日	日本動物学会　動物学雑誌　徳島地方の鳥類目録（追加）発表	動物学雑誌 315 号
			5 月中頃	第 2 回剣山探鳥行　**ヤマドリ、ハチクマ**を観察	野鳥 S 18.3 月号
			月日不明	上京　内田清之助を訪問、当時我国鳥学界の最高権威飯島博士への紹介状を書いてもらい、東京帝国大学動物学教室で飯島 魁博士に会う：研究には学理や学説ばかりに偏せず、実際上のことにも重きをおかなければならぬという意味の話をされたことは、私一生の好指針となっている。又、同研究室で黒田長礼氏に会う"	野鳥 S 18.4 月号
大正 5	1916	43 歳		日本鳥学会入会	野鳥 S 17.11 月号
大正 6	1917	44 歳	1 月	高野山中学奉職　　農林省の委託を受けて高野山を中心とする付近一帯の鳥類調査を実施	野鳥 S 17.11 月号
大正 7	1918	45 歳		**狩猟法全部改正：狩猟鳥獣の指定**	
大正 12	1922	49 歳	8 月下旬	東京　農林省　鳥獣調査嘱託者会議　川口孫治郎氏との出会い	野鳥 S 12.6 月号
大正 14	1924	51 歳	8 月	東京　農林省　鳥獣調査嘱託者会議　川村多実二氏との出会い　東京神田の「森田旅館」で川村、川口、榎本が同宿し、夕方から翌朝まで鳥談議	野鳥 S 12.6 月号
大正 15	1925	52 歳	4 月	高野山中学　学友会「三密」に「高野山の鳥類に就て」掲載　**ブッポウソウ**の保護について記述（当時は**ブッポウソウ**が夜に仏法僧と鳴くと信じられていた）	三密
			月日不明	日本動物学会第 2 回大会（京都）で講演　「余、鳥類生態の研究に志すことここに四十年」として鳥類保護に関する講演	野鳥 S 17.11 月号
昭和 3	1928	55 歳	5 月	雑誌「鳥獣」に「奇妙な鳴き声の**アオバト**」掲載	鳥獣第 3 巻 5 号
昭和 6	1931	58 歳	6 月 20 日	高野山の自宅で睡眠中、**ブッポウソウ**の声に目を覚ます　※当時は**コノハズク**の声とは知られていなかった	鳥獣報告集第 15.16 号
昭和 8	1933	60 歳	3 月	高野山中学退職、大阪に転居　森田淳一氏との出会い（内田博士紹介）	野鳥 S 18.4 月号
			10 月 14 日	住吉浦　　**ハヤブサ**の襲撃を免れた**イソシギ**を観察	野の鳥の思い出
昭和 9	1934	61 歳	3 月 11 日	**日本野鳥の会創設　中西悟堂**	
			6 月	「大阪府郷土博物誌」　大阪府の鳥類について　　初の大阪府鳥類目録	大阪府郷土博物誌
昭和 10	1935	62 歳	6 月 7,8 日	鳳来寺山の**ブッポウソウ**の声を名古屋放送局がラジオで初の生中継　仏法僧論議がさかんに　声の主は**コノハズク**と判明	野鳥 S 10.8 月号
			8 月	「**ブッポウソウ**と**コノハヅク**問題」に関する一研究　榎本佳樹　「野鳥」誌で発表	野鳥 S 10.8 月号
			9 月 27, 28 日	巨椋池の鳥視察　森田淳一氏と　巨椋池；古来鳥類の棲住地として名高く、殊に近畿地方に於ける好猟場の一つで、毎年開猟日には、遠近各地から猟天狗連が蝟集して、丁度軍隊が発火演習でもしているような、盛んな銃声をさせるのが例となっている程であったが・・・米産地を増やす必要から干拓工事が一昨年頃から進められている。	野の鳥の思い出
昭和 11	1936	63 歳	5 月 22 日	大和川河口から東北方千メートルの葦原　**ベニビタイキンランチョウ**を観察	野の鳥の思い出
			9 月 29 日	新淀川河口　**オバシギ**を食べた**トビ**	
昭和 12	1937	64 歳	1 月	「鳥と家屋」野鳥誌掲載　家屋に巣を造る鳥についての論文	野鳥 S 12.1 月号号
			2 月 18 日	「大阪郊外の半日」中西悟堂、榎本佳樹と仲哀天皇陵周辺を探鳥	野鳥 S 12.4 月号
			2 月 19 日	**日本野鳥の会阪神支部発会式**　講演会・座談会 大阪三越 8 階大ホール　午後 1 時～11 時　榎本佳樹「野鳥の観察」 中西悟堂、内田清之助、川村多実二、竹友藻風、森田淳一、筒井嘉隆、小林桂助ほか 29 名出席	野鳥 S 12.3 月号
			3 月 14 日	箕面奥山探鳥ハイキング　阪神支部第 1 回探鳥ハイキング(阪急電鉄主催阪急ワンダーフォーゲルとタイアップ)参加者 300 余名　政の茶屋で榎本佳樹 講演	野鳥 S 12.4 月号
			4 月 12 日	有明海の鳥の調査　安部幸六氏、森田淳一氏と三人で朝から船を出し、佐賀県犬井道（いぬいどう）の沖に、潮が引いて夜 9 時まで身動きできない状況に**･･･有明海の干潟でシギ・チドリ**を見ながら 11 時間も立往生したというエピソード	野鳥 S 17.11 月号

元 号	西暦	満年齢（年末）	月 日	出来事（野鳥に関するエピソードなど）	出 典
昭和 12	1937	64 歳	5 月 9 日	阪神支部主催　紀見峠探鳥会　榎本佳樹指導、参加 21 名	野鳥 S12 年 8 月号
			6 月 6,7 日	豊能郡天王付近で鳥類観察　「天王附近の鳥類」	野鳥 S12 年 9 月号
			6 月 11,12 日	阪神支部主催　吉野川大台ケ原探鳥会　榎本佳樹指導、参加 15 名　**コマドリ、アカショウビン**など 33 種確認	野鳥 S12 年 8 月号
			7 月	**盧溝橋事件　日中戦争開戦**	
			7 月 18 日	大毎野鳥の会主催･本会後援　岩湧山探鳥会　岩湧寺本堂で講演：榎本佳樹「大阪近郊の野鳥」、榎本の第一声「わたくしは、飼鳥のことは鶏のことも知らん」、中西悟堂講演「野鳥とハイキング」　参加者 200 余名　27 種確認	野鳥 S12 年 9 月号
			7 月 20 日	阪神支部第二回野鳥懇話会　中西悟堂が参加　天王寺区茶臼山「雲水」大広間　森田支部長、守山、榎本他 28 名参加	野鳥 S12 年 8 月号
			10 月 3 日	阪神支部　淀川河畔の鷭・千鳥観鳥会　　参加者 33 名　**オグロシギ、ダイシャクシギ、ホウロクシギ**など 19 種確認	野鳥 S12.12 月号
			中秋	浪速神宮造営に関する運動　皇紀 2600 年記念事業とし、仁徳天皇の御陵なる百舌鳥耳原中陵周辺を一大神域となる浪速神宮造営を要望　要望書に「仁徳陵の水禽調査報告書」（榎本佳樹調査）を添付"	野鳥 S12.12 月号
昭和 13	1938	65 歳	1 月 9 日	阪神支部主催　山田池鴨場見学会を兼ねた新年宴会 実地指導　榎本佳樹	野鳥 S13.3 月号
			2 月 10 日	京都桂川畔の越冬燕を観察　「寒中の**ツバメ**」榎本佳樹	野鳥 S13.4 月号
			3 月 18 日	「野鳥便覧」上巻発行　内田清之助序文	
			4 月 5 日	「野鳥便覧」上巻出版記念会　堂ビル内清交社別室で	野鳥 S13.5 月号
			6 月 4,5 日	大毎野鳥の会　吉野山探鳥会　中西悟堂参加　榎本佳樹「奥吉野の野鳥」講話　　如意輪寺で**コノハズク**の声 5 日夜守山鴻三（白雲）初代幹事慰労晩餐会（送別会）梅田新町「むさ志本店」	野鳥 S 13.7 月号
			6 月 26 日	奥箕面鳥類調査　府営箕面キャンプ場の完成にあたり管理を担当する阪急電鉄より調査依頼　榎本、平松、岡田担当　25 種確認	野鳥 S 13.8 月号
			7 月 17 日	堀田光鴻の祖父龍之助翁の遺作見学　能勢口の堀田氏親戚宅でたくさんの鳥の絵を見学	野鳥 S 13.12 月号
			7 月 25 日～8 月 1 日	樺太の鳥界視察　阪神支部長森田博士に随伴　　**シマアオジ、ツメナガセキレイ、オオモズ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、ノゴマ、オジロワシ、コシジロアジサシ、シロカモメ、ウミガラス、ケイマフリ**などを観察	野の鳥の思い出
昭和 14	1939	66 歳	3 月	「大阪市内で繁殖する野鳥について」　16 種を解説	『吉田博士祝賀記念誌』第 1 巻
			5 月 1 日	雑誌「ホームライフ」にコラム掲載　「渡り鳥」榎本佳樹　住吉裏（浦）、新淀川の渡り鳥を紹介	ホームライフ 5 月
			5 月 21 日	中西悟堂氏歓迎大阪支部懇談会　心斎橋ドンパルにて　榎本佳樹　鳥談	野鳥 S 14.7 月号
			5 月 22 日	新淀川河口付近　中西悟堂、榎本佳樹、森田淳一　探鳥	野鳥 S 14.7 月号
			6 月 11 日	大毎野鳥の会後援　箕面山探鳥会　野鳥愛護の講演、小鳥愛護標識を勝尾寺境内に設置　中西悟堂も参加	野鳥 S 14.8 月号
			6 月 24 日	大阪支部主催　岩湧山探鳥会　岩湧寺で 1 泊 **アカショウビン**鳴く	野鳥 S 14.8 月号
			7 月 12 日	大阪中央放送局（BK）榎本佳樹「夏の山の鳥」と題する講演を放送	野鳥 S 14.9 月号
			9 月 3 日	淀川河口鷭千鳥観鳥会　大阪支部主催　終了後、榎本、堀田、藤原で木津川河口へ　船を頼み処女地である対岸の葦原へ	野鳥 S 14.10 月号
昭和 15	1940	67 歳	2 月	福岡県で 1 月 4 日に捕獲された鳥を *Tetrax tetrax orientalis*（Eastern　Little Bustard）の若鳥と鑑定し、和名を**ヒメノガン**とつける。 ※安部幸六「珍鳥 *Tetrax tetrax orientalis* HARTERT に就て」『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第十四集』福岡縣 昭和 18 年	鳥第 50 号(昭和 15 年 9 月)
			6 月 8 日～12 日	中西悟堂と九州へ　川口孫治郎氏（昭和 12 年 3 月 19 日死去）の墓参　6 月 8 日福岡鳥の会　講演「人生と鳥との関係及鳥の保護に就いて」 6 月 9 日高良山探鳥会　川口氏の墓参　6 月 12 日、安部幸六氏夫妻、川口得（川口孫治郎夫人）と英彦山に登る	野鳥 S 15.7 月号
			6 月 15,16 日	大毎野鳥の会比叡山探鳥会　延暦寺宿坊泊　BK 放送猪川琥氏の「野鳥漫談」、翌日は榎本の「比叡山の鳥」、悟堂の「鳥と風景」の講演	野鳥 S 15.7 月号
			7 月 18 日～20 日	日本アルプスの一部へ探鳥旅行　藤原広蔵、長久友男、堀田幹事　上高地、徳沢、常念、燕岳など　　**オオジシギ、クマタカ、ハリオアマツバメ、マミジロ、コマドリ、ウソ、ライチョウ、イワヒバリ、ホシガラス**など 64 種を観察　例外的な**オオワシ**の観察も	野の鳥の思い出
			7 月 29 日	猪川琥氏送別並びに春からの収穫を語り合う会(梅田ホテル)京都放送局長栄転の猪川氏の送別会　榎本：英彦山､日本アルプス探鳥報告	野鳥 S 15.8 月号
			11 月 2 日	琵琶湖西岸南船木探鳥　川村多実二、堀田光鴻、藤原廣蔵と四人　11 月 20 日に一人同地に行った堀田氏が「大阪附近海岸線の探鳥スケッチを禁じられた僕等にはここは実に天国である」と･･･。大阪市域の海岸線の立入規制が始まったのか？	野鳥 S 17.3 月号

元号	西暦	満年齢（年末）	月 日	出来事（野鳥に関するエピソードなど）	出 典
昭和 16	1941	68 歳	5 月 11 日	大阪支部鷸千鳥探鳥会　参加者は神戸支部から小林桂助、桑田鉄也、大阪支部が榎本、丸山、藤原、堀田の計 6 名。鷸千鳥は一般の方には余り興味がないと見え、回を経るごとに参加者は減少するが、結局はこの六人位が残るらしい。午後は淀川河口から住吉浦へ場所をかえて探鳥。	野鳥 S 16.7 月号
			6 月 15 日	野鳥便覧　下巻発行 藤原廣蔵の資金援助で大阪支部が発行	
			7 月 15 日	野鳥便覧　下巻出版祝賀会　川村多実二京都支部長、小林佳助神戸支部長他参加者 28 名	野鳥 S 16.8 月号
			7 月 22～25 日	雨の徳沢行　　藤原広蔵氏と二人　**マガモ、ホシガラス、ミゾゴイ、トラフズク**等 54 種を観察	野の鳥の思い出
			秋	安部幸六氏と吉野山探鳥登山	野鳥 S 17.11 月号
			12 月 8 日	**太平洋戦争開戦**	
昭和 17	1942	69 歳	5 月 6 日	岩湧山で探鳥　藤原廣蔵、堀田光鴻、榎本佳樹で岩脇寺一泊行　近年付近の山林が盛んに伐採され鳥類減少憂うべきもの	野鳥 S 17.7 月号
			5 月 23,24 日	大阪支部高野山探鳥会　高野山清浄心院で 1 泊　参加 22 名　36 種	野鳥 S 17.9 月号
			8 月 2 日	高野山：大毎戦時夏季大学科外講座　「高野山の野鳥について」講演	野鳥 S 17.10 月号
			9 月 20 日	名古屋での講演（理研映画からの依頼）と木曽川中流部で探鳥	野鳥 S 17.11 月号
			11 月 1 日	文芸春秋 11 号「野鳥を追う人々」中西悟堂　中西悟堂が野外鳥学の四天王（川口孫治郎、榎本佳樹、中村幸雄、仁部富之助）として榎本を紹介	文芸春秋 20 巻第 11 号
			11 月 1 日	野鳥 11 月号　「榎本佳樹氏古希記念特集」	野鳥 S 17.11 月号
			12 月	「野の鳥の思い出」出版　日新書院	
			12 月 4 日	古希祝賀会　大阪市有恒倶楽部別室　　古希祝寄付金　830 円（61 名、166 口）	野鳥 S 18.3 月号
			12 月 27 日	来住の鴨池　**ヒシクイ** 120 羽以上観察　堀田光鴻、藤原廣蔵、榎本佳樹で探鳥	野鳥 S 18.5 月号
昭和 18	1943	70 歳	1 月 16,17 日	下池（岐阜県）に雁を見る　大阪支部・中京支部合同冬季探鳥会 大阪支部からは堀田光鴻、藤原廣蔵、榎本佳樹が参加、16 日夜は榎本が雁鴨類の野外識別講座開催	野鳥 S 18.5 月号
			12 月 12 日	京都支部談話会　本年の**ヒシクイ**飛来状況報告	野鳥 S 18.11.12 月号
昭和 19	1944	71 歳	9 月 1 日	「野鳥」終刊号　「野鳥」の廃刊を惜しむ　の中で　次の様に書かれている。　もしも「野鳥」に連載されるとしたら、私が相当長生をしても、一生の間に書き尽くせるかどうか判らぬだけの量があるので、これからも大いに書かせてもらうつもりで、殊に野鳥の生態や保護などに関することに、一層力を入れたかったのである。･･･　私は二三年前からある特殊の原因で、少しずつ体力が衰え、身心ともに昔日の元気を失っていたのが、最近では特にそれが甚だしく、手紙を書くこと以上の仕事は勿論、日誌を書くことさえ億劫でたまらぬ様になり、且つ他に事情もあって、「野鳥」への送稿を休止し、専ら健康の快復に努めている内に、中西主幹から「野鳥」廃刊のお知らせをいただき、そんなことになるのではないかと、前から気にかかっていたことながら、がっかりした様な次第である。･･･	野鳥 S 18.5 月号
昭和 20	1945	72 歳	1 月 28 日	急性肺炎のため自宅で逝去　29 日、自宅（都島区北通四の十三）で告別式	毎日新聞記事
		—	6 月 7 日	第 3 回大阪大空襲　都島の自宅が全焼　未発表の資料や残されていた文献などが焼失	
			8 月 15 日	**終戦**	

【参考】

榎本佳樹は、日本野鳥の会ができるまでは、動物学会や鳥学会に論文を投稿していた。鳥学会の「鳥」に掲載されたものは右のとおりである。

日本鳥学会「鳥」掲載記事･論文　榎本佳樹

記事・論文タイトル	掲 載 号
高野山ニテ見タル冬季ノ鳥類	鳥 1(4) 1917 p.39-39
高野山ニテ獲タルおほみづなぎどり	鳥 1(5) 1917 p.74-77
高野山の一年	鳥 2(7) 1918 p.118-123
四國地方に於けるツバメ類の『渡り』並びに習性等に就て	鳥 2(8) 1919 p.156-157
イヌワシの飛翔に就て	鳥 3(12-13) 1922 p.72-76
汽車の窓より	鳥 5(21) 1926 p.41-47
奈良京都方面鳥類一覧	鳥 5(25) 1928 p.453-462
大阪で見たエリグロアジサシに就て	鳥 6(26) 1928 p.38-40
大仙陵附近のサギ類偵察	鳥 6(26) 1928 p.40-43
再びエリグロアジサシに就て	鳥 6(28) 1929 p.160-167
高野山のコシアカツバメに就て	鳥 7(33-34) 1932 p.280-287

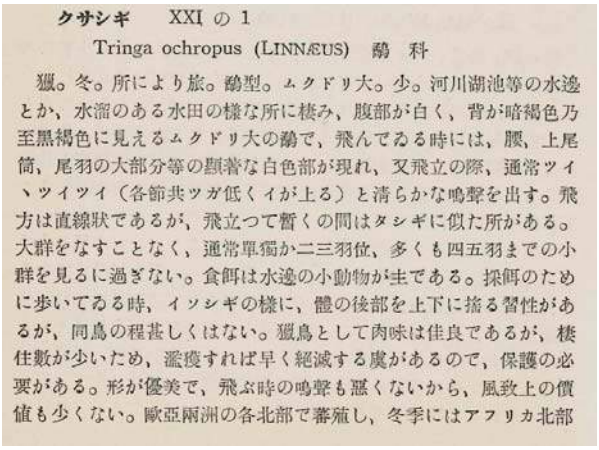
－ 2024年2月予定 －

大阪支部の宝「野鳥便覧」　復刻版を出版します

「野鳥便覧」上巻（1938 年）・下巻（1941 年）は、野外識別に重点をおいた画期的な野鳥図鑑であり、鳴声や肉味の解説は唯一無二。
鳥の全長や翼長などの数値は、今も多くの図鑑が引用している。
　上巻は初代支部長森田淳一氏が、下巻は藤原廣蔵氏（後の第 2 代支部長）の全面的な資金援助で大阪支部が発行。発行部数は両巻とも 500 部で、古書店でも最も入手困難な幻の図鑑となっている。



・図版はすべて榎本佳樹の自筆
・背景に生息環境を描いた美しく正確な図版
・上巻　78 種
・下巻　216 種
・下巻の巻末には鳥類測定表を 10 頁にわたり掲載。榎本が採集した鳥を実測したもの。



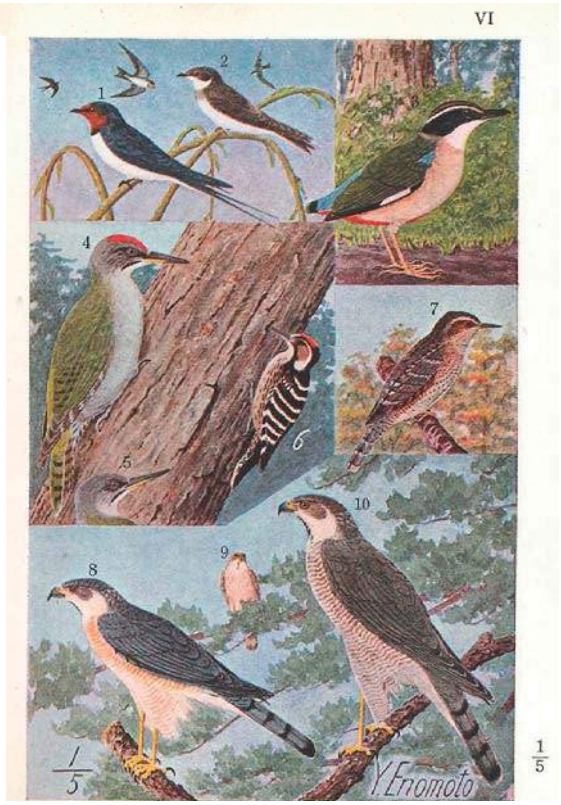
クサシギ　XXI の 1
Tringa ochropus (LINNÆUS)　鷸　科

獵。冬。所により旅。鷸型。ムクドリ大。少。河川湖池等の水邊とか、水溜のある水田の様な所に棲み、腹部が白く、背が暗褐色乃至黑褐色に見えるムクドリ大の鷸で、飛んでゐる時には、腰、上尾筒、尾羽の大部分等の顯著な白色部が現れ、又飛立の際、通常ツイヽツイツイ（各節共ツガ低くイが上る）と清らかな鳴聲を出す。飛方は直線狀であるが、飛立つて暫くの間はタシギに似た所がある。大群をなすことなく、通常單獨か二三羽位、多くも四五羽までの小群を見るに過ぎない。食餌は水邊の小動物が主である。採餌のために歩いてゐる時、イソシギの樣に、體の後部を上下に搖る習性があるが、同鳥の程甚しくはない。獵鳥として肉味は佳良であるが、棲住數が少いため、濫獲すれば早く絕滅する虞があるので、保護の必要がある。形が優美で、飛ぶ時の鳴聲も惡くないから、風致上の價値も少くない。歐亞兩洲の各北部で蕃殖し、冬季にはアフリカ北部

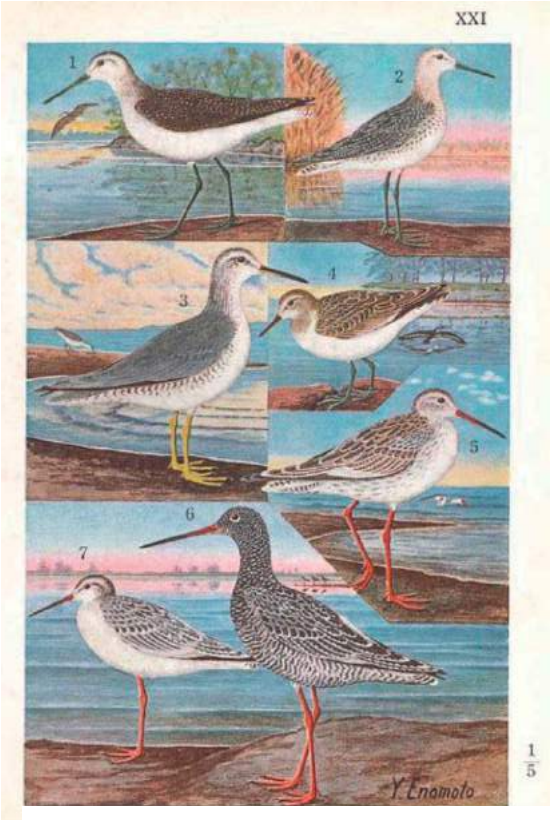
解説文
クサシギ
・生息環境、体の色や大きさ、鳴声、跳び方、餌、採餌行動、特徴的な行動など、野外での識別ポイントを解説
・肉の味
・保護の必要性
・風致上の価値
・分布
などにも言及

鳥名	全長（粍）			翼長			尾羽長			嘴峰長			跗蹠長			翼開長			體重（匁）		
	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均
シマアヂ	400	355	378	192	172	183	68	62	66	40	36	38	31	28	30	628	556		123.3	71.9	100.0
ヨシガモ	515	437	480	253	220	240	84	66	75	48	37	43	42	35	38	883	749		230.7	150.8	195.0
ヒドリガモ	530	428	485	272	220	248	118	80	98	38	28	35	41	35	39	835	681		251.7	150.9	202.0
ヲナガマモ	750	530		285	230		228	95		58	45		47	37		940	730		321.2	165.3	
ハシビロガモ	510	435		250	217		88	70		71	56		39	32		838	715		220.6	120.7	
オシドリ	475	408		237	210		116	92		33	28		40	37		770	698		203.0	115.6	
ホシハジロ	483	430		214	195		65	50		52	44		41	36		800	712		250.3	180.8	
キンクロハジロ	437	375		205	180		61	45		43	37		37	33		758	654		271.6	150.3	
スマガモ	468	434		218	195		64	48		46	40		39	35		800	742		288.2	158.7	
ホシジロガモ	473	400		227	197		90	65		37	28		39	30		754	638		237.1	141.2	
コホリガモ	594	380		240	200		240	55		30	26		36	32		800	700		295.9	181.0	
ビロウドキンクロ	550	500		290	238		95	75		51	40		50	42		1000	862		462.4	303.7	
クロガモ	512	432		224	203		102	70		45	40		47	43		910	768		361.5	194.7	
ミコアイサ	442	385		195	172		77	63		31	25		33	28		700	610		200.0	130.6	
ウミアイサ	590	522		251	215		90	70		62	50		48	42		864	767		337.0	194.9	
カハアイサ	706	603		285	260		105	93		58	53		51	46		965	824		486.4	285.7	
カハウ	840	780	813	340	311	330	170	148	160	70	55	65	63	59	60	1335	1240	1292	731.2	565.3	650.0
ウミウ	865	800	838	350	305	335	170	147	160	73	64	70	66	60	64	1375	1276	1332	809.0	604.4	701.1
ヒメウ	762	673	727	275	252	265	157	130	148	53	46	50	60	50	55	980	953	980	438.0	278.0	350.3
ヒメクロウミツバメ	197	172	188	162	140	152	80	63	74	15	13	14	25	20	23	404	353	385	11.4	7.8	9.7
オホミヅナギドリ	512	455	491	330	303	313	150	121	140	53	46	50	54	45	50	1132	1000	1120	240.9	159.4	203.7
ハシボソミヅナギドリ	356	325	345	270	254	264	87	78	84	36	31	33	52	48	50	905	837	877	125.0	85.1	106.6
アハウドリ	940	838	914	560	508	540	170	140	160	145	127	136	101	99	100	2135	1903	2065	1404.3	918.8	1205.4
クロアシアホウドリ	813	740	786	508	457	480	145	140	143	112	100	108	95	90	92	1846	1680	1784	886.3	588.7	748.3
カンムリカイツブリ	579	533	563	195	170	187				53	40	50	65	52	60	880	809	855	360.4	239.8	303.9
アカエリカイツブリ	490	445	472	193	180	185				56	46	50	65	52	60	824	749	794	232.5	154.2	196.9
ハジロカイツブリ	343	304	330	133	120	127				25	21	23	43	39	40	590	515	559	120.5	69.5	96.7
カイツブリ	275	248	260	105	90	100				22	19	21	38	33	36	470	424	448	65.0	40.5	53.7

巻末の鳥類測定表：全長、翼長、尾羽長、嘴峰長、ふ蹠長、翼開長、体重が、それぞれ測定値の大・小・平均という形で詳しく示されている。



1 ツバメ　2 ショウドウツバメ　3 ヤイロチョウ
4 ヤマゲラ♂　5 同♀　6 コアカゲラ　7 アリスイ
8 エッサイ（ツミの♂）　9 同幼鳥　10 ツミ（ツミの♀）



1 クサシギ　2 タカブシギ　3 キアシシギ
4 イソシギ　5 アカアシシギ　6 ツルシギ夏羽
7 同冬羽

榎本佳樹生誕 150 年記念企画展の開催　きしわだ自然資料館

榎本佳樹の野鳥愛　～明治、大正、昭和、野鳥の生態研究と愛護運動にかけた生涯～

2024 年 2 月 23 日(祝)～3 月 24 日(日)（月曜日・2 月 29 日・3 月 21 日休館）会場：きしわだ自然資料館
榎本佳樹の足跡や功績、当時の大阪の自然や鳥類の状況、野鳥便覧の他、鳥類図鑑の変遷等を展示予定
詳細は次号むくどり通信 281 号でお知らせします。